

## 2015アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト 報告書

日本学校名[市立札幌大通高等学校] 担当教諭名[杉山讓司・佐藤千恵子・佐藤由季] (異文化理解 1-4年 36名)  
 交流相手国[フィリピン] 海外学校名[Philippines Normal University-Institute of Teaching and Learning]  
 担当教諭名[Carmela M. Buhain / Maria Eljie M. Mabunga]

### ■実施教科・時間数について教えてください。

アートマイルに関連した 実施教科・時間数	教科	単元名	時間数
	英語科異文化理解	アートマイルプロジェクト	13週(26授業時間)

### ■作品について教えてください。

題(テーマ)	Festivals-Festivities: A Mirror of Our Cultures. With an Awareness of ESD.
絵に込めたメッセージ	祭、祝祭は私たちの文化を映し出す鏡である。地域の伝統として持続している祭、新しく発展してきた祭を描くことで、地域文化の持続可能性について意識してほしいという思いを込めた。両校ともユネスコスクールとして、ESDを大切にしてきたため、本テーマにその観点を込めた。
	

### ■今回の取り組みの成果と課題はどういった点でしょうか？

成 果	課 題
例年通り、大変得難い多文化共生教育になった。 プロジェクト開始直前(7月末)、担当教員が相手校を訪問するという好機に恵まれ、プロジェクトの進め方等について教員同士で打ち合わせを行えたことは大きなアドバンテージとなった。また、相手校の生徒にも出会い、その様子を帰国後に生徒たちに伝えることができ、今まで以上に生徒同士も親しく感じながらプロジェクトを進めることができたのではないかと。 スカイプ会議、ビデオレターの交換も昨年同様に行い、コミュニケーションを密に取り合うことで、共同で作成する壁画の質を高めていくことができるといふことを感じることもできたようである。	絵に込めた ESD の発展学習が足りなかった。 また、例年のことではあるが、授業の一環として取り組む以上、休業期間、家庭学習日との重なりで、授業が行えない週が続いた時に、相手校へのリアクションが遅くなってしまう場合がある。その点をどうフォローしていくかは今後も課題である。

### ■アートマイルに取り組む前と比べて相手国や世界に対しての意識はどう変わりましたか？

児童生徒の意識の変化	教師の意識の変化
本校の異文化理解の授業は「他者の物の見方を知ること、自分と異なる文化への許容力を高め、同時に自分の物の見方、自文化を客観視し、批判的に見つめ直すことができるようになる」ことを目標としているが、本プロジェクトが始まる前の学習で得たこと(ステレオタイプについて、人種・民族問題、他)が、実際に他国の生徒たちと交流することで、生きた力になっていると思われる。	本プロジェクトの一環として、相手校を訪問した際に、戦時中の日本が残した傷跡を見る機会があったが、その説明をしてくれた担当教員も冷静に、「これもまた私たちの国を作り上げた歴史の一つ」であることを私たち日本人に教えてくれた。フィリピンの人達の懐の深さを初めて知ることができた。そのような思いを歴史とともに生徒に伝えたいという思いを持つことができた。

■主な活動の流れを教えてください。

場面	時期	活動内容	児童生徒の反応	実施教科等
自己紹介	9月 1月	9月には生徒各自が自分のことで伝えたいこと(趣味、フィリピンへの関心など)を録画したビデオレターを作成。1月は相手校が壁画を制作している間、母語紹介という視点で、日本語の好きなフレーズを覚えてもらうビデオレターを作成。	英語で紹介文の原稿を書くことも、発表することも、人前(クラス内)で話すことも苦手とする生徒も、実際に伝えたい相手がいるという思いが、一歩前に進めさせた。	異文化理解
テーマ学習	10月 11月 2月	10月には JICA の出前講座としてフィリピンで活躍された協力隊の方からその文化、日常生活などについて講演いただいた。11月にはお互いの文化をフォーラムで紹介し、それぞれへの質問、感想のやり取りをフォーラムとスカイプで行った。2月にはその一環として、札幌雪まつりを実地で紹介するビデオレターを作成。	多くの生徒にとって、名前くらいしか知らなかった国、観光紹介の情報しか持たなかった国について、生活感をもってイメージが膨らんできた。スカイプ会議では短い時間ではあったが、直接言葉を交わすことができた喜びを感じた。フィリピンの祭の質問に対して直接答えがもらえたことは大きな喜びだった。	異文化理解
構図決定	11月	相手校訪問の際に教員同士で確認した壁画の区割りについて、スカイプ会議で生徒同士確認した。デザインについては、生徒各自が描いた祭のイメージから代表生徒を各部(午前・午後・夜間)の講座から一人ずつ選び、その生徒たちに担当箇所の下絵を描いてもらった。	一つ一つの区割りが単純ではないため、その中にそれぞれの祭のイメージを描きこむのに苦労した。	異文化理解
壁画制作	12月	まずプロジェクタを使い下絵の線画を仕上げ、その後各部の授業では、その代表生徒が下絵を描いた箇所を中心に色塗りをした。今回は区割りが複雑だったこともあり、授業時間内で終わらず、冬季休業中に受講生の有志で完成させた。	色塗りに際しては、思ったような色を出す(絵の具の混ぜ合わせ)に苦労した。3部でまさに絵筆をリレーしたこと、休業期間に3部合同の有志チームで仕上げを行ったことは、部を超えた協働になった。	異文化理解
鑑賞・振り返り	3月	最後の授業に間に合って届いた完成作品を鑑賞し、本プロジェクトの感想を出しあった。またその後の全校行事(プレゼンテーション大会)のポスターセッションで、壁画を掲げたスペースにて本プロジェクトの成果を発表。	完成作品を観たときに、「最初は、2つの離れた国で1枚の絵を描くなど不可能だと思っていたが、それが現実になった」と感慨深く感想を述べた生徒が何人もいた。ポスターセッションを聞いた他の生徒にも本プロジェクトの意義が伝わったことに満足感を感じていた。	異文化理解

■学習目標(つけたい力)と成果(ついた力)について教えてください。

「目標」先生が指導に当たって重視したことをABCで記入(A:特に重視した B:重視した C:特に重視しなかった)

「成果」先生の手応え(5:とても身についた 4:身についた 3:どちらともいえない 2:あまり身につかなかった 1:身につかなかった)

学習目標・つけたい力	目標	成果	成果についてそう感じた場面・理由
自文化の理解	A	5	相手に伝えようとすることで、自文化への理解がより深まっていた。
異文化の理解	A	4	自文化の常識が他の文化では当たり前ではないのだということを理解していた。
コミュニケーション力 (説明・共感・英語)	A	4	相手と理解し合いたいという思いから、足りない技能をなんとか補う努力をしていた。
情報活用能力 (情報収集・発信)	A	4	インターネットをしっかりと活用していた。
人間関係をつくる (学級内・交流相手)	A	4	祭・祝祭の紹介などでペア、グループでの取り組みが見られた。スカイプ会議への参加が積極的であった。
協働する力 (役割分担・協力)	B	4	壁画の下絵、絵塗りなどの作業分担が明確であった。絵塗りでは3部合同有志での仕上げに関わった生徒が多かった。
学習を追究する意欲	B	3	壁画のテーマの ESD の視点について、改めて深める時間が足りなかった。
表現力 (伝えたいことを絵で表す)	B	5	全員で祭の下絵案を書いた上で代表生徒を決めたことで、それぞれに意識的に絵塗りに取り組めた。
作品を鑑賞する力	B	4	相手校の描いた部分(祭)にどのような意味があるのか、ビデオレターを送ってくれた、その説明により、作品をより深く理解できた。